

セッション I 記録

「災害時における障害のある児童生徒の支援のための学校の在り方」

コーディネーター 西牧謙吾(国立特別支援教育総合研究所)

基調報告

櫻田博氏(宮城県立石巻支援学校 校長)

菅井裕行氏(宮城教育大学教育学部 教授)

指定発言

佐々木政義氏(岩手県教育委員会事務局学校教育室 首席指導主事兼特別支援教育担当課長)

高屋隆男氏(福島県立聾学校 校長)

<基調報告及び指定発言>

セッション I では、まずコーディネーターの西牧より、本セッションの趣旨として、東日本大震災での経験を通して、災害時における障害のある児童生徒の支援のための学校の在り方について議論を深めたい旨の説明を行った後、基調報告及び指定発言が行われた。

櫻田氏からは、特別支援学校校長の立場から、「東日本大震災に学ぶ学校の危機管理体制の在り方」と題して、震災時の概要、石巻支援学校の対応、震災からの教訓等について報告があった。

菅井氏からは、研究者の立場から、「東日本大震災被災地における被災障害児・者をめぐる課題」と題して、震災時による被害状況、実際の支援活動、今後の検討課題等について報告があった。

佐々木氏からは、特別支援教育担当の行政の立場から、「東日本大震災津波における取組等について」と題して、特別支援学校における被害の概要、対応状況、今後の対応等について指定発言があった。

高屋氏からは、特別支援学校校長の立場から、「東日本大震災における特別支援学校(福島県)の対応等について」と題して、特別支援学校の被害状況、緊急連絡体制、避難所運営等について指定発言があった。

<シンポジウム>

諏訪清二氏(兵庫県立舞子高等学校 教諭)

吉田弘和氏(宮城県子ども総合センター 主任主査)

櫻田博氏(宮城県立石巻支援学校 校長)

菅井裕行氏(宮城教育大学教育学部 教授)

諏訪氏からは、高等学校教諭の立場から、「防災教育」と題して、舞子高等学校の環境防災科、震災・学校支援チーム等について話題提供があった。

話題提供を踏まえ、コーディネーターから、櫻田氏に対しては、諏訪氏による防災教育の話に学べるところ及び学校での対応について、菅井氏に対しては、外部からの支援に関連して、それぞれ質問があった。

櫻田氏からは、知的障害のある子どもが主体的に命を守るため、学校の枠を超えた地域生活を想定した防災教育を教育課程の中にもどう反映していくかということと、守られるだけでなく、地域の中で地域住民のサポーターとして育てていくことが重要と考える旨の回答があった。

菅井氏からは、今回の経験から、学校職員が地域の防災対応を担う可能性があることを踏まえ、教員養成のカリキュラムの中にも位置づける必要性、及び外部から多くの支援の申し入れが学校にあることを踏まえ、それらをコーディネートする力の必要性について回答された。

吉田氏からは、心理専門職の立場から、「医療からみた東日本大震災の子どものこころ」と題して、震災時による被害状況、宮城県子ども総合センターとしての支援活動等について話題提供があった。

フロアから、行政単位が異なる県立学校と市町村の行政等との連携の工夫について質問があった。

櫻田氏からは、学校が位置する地域及び児童生徒が居住する地域との連携の必要性に触れ、県から石巻市に申請に行き、認可を受けて避難所になったことや地元の市議会議員のコーディネートがあったこと等のエピソードが紹介され、今後、さらに地域連携型の防災教育を探っていく必要性について回答があった。

コーディネーターより、各県での心のケアの状況について質問があった。

櫻田氏からは、学校を再開するまでは不適應行動が多かったが学校再開後に消失したエピソードに触れ、子どもにとって、普段どおり学校生活を送らせることが心の安定につながる旨、述べられた。

高屋氏からは、放射能対応による活動制限があるが、普段と変わらない活動が増えてくると子どもが落ち着いてくるようだと紹介があった。

佐々木氏からは、仮設住宅での保護者の精神的ストレスについて紹介され、大人への支援の重要性について述べられた。

吉田氏からは、母親のほうが相談機関等の利用が上手であるのに対し、それらを利用しようとしない父親への支援も重要だと述べられた。

諏訪氏より、阪神淡路大震災では特別なケアの必要な児童・生徒の数は、3年後にピークになり、その後も継続して見られたという経験から、今後も引き続きサポートを続ける必要性について述べられた。

コーディネーターより、充実した議論が行われたことが確認され、謝辞が述べられた。